

1.	胃や小腸で吸収されたアルコールは、肝臓へと運ばれて一度アセトアルデヒドに代謝されたのち、さらに代謝されて酢酸となる。
2.	大腸の腸内細菌は、血液凝固や骨へのカルシウム定着に必要なビタミンDを産生している。
3.	唾液には、デンプンを分解する消化酵素が含まれている。
4.	肝臓は、必須アミノ酸を生合成している。
5.	小児は、血液脳関門が未発達であるため、循環血液中に移行した医薬品の成分が脳の組織に達しにくい。
6.	ペプシノーゲン は、胃酸によって、タンパク質を消化する酵素であるペプシンとなり、胃酸とともに胃液として働く。
7.	皮膚は、表皮、真皮、皮下組織の3層構造からなる。
8.	胸部の左右両側に1対あり、肺の筋組織を収縮・弛緩することにより呼吸運動が行われる。
9.	坐剤は、肛門から医薬品を挿入することにより、薄い小腸内壁の粘膜から有効成分を吸収させるものである。
10.	軟膏剤は、油性の基剤で皮膚への刺激が弱いため、患部がじゅくじゅくと浸潤していても使用できる。
11.	通常、糞便の成分の大半は食物の残渣で、そのほか、はがれ落ちた腸壁上皮細胞の残骸や腸内細菌の死骸が含まれる。
12.	平滑筋は、筋線維に骨格筋のような横縞模様がなく、消化管壁、血管壁、膀胱等に分布し、比較的強い力で持続的に収縮する特徴がある。
13.	交感神経と副交感神経は、効果器でそれぞれの神経線維の末端から神経伝達物質を放出しており、副交感神経の節後線維の末端から放出される神経伝達物質はアセチルコリンである。
14.	経口液剤は、比較的緩やかに消化管から吸収されるため、固形製剤よりも有効成分の血中濃度が上昇しにくい。
15.	骨格筋は、筋線維を顕微鏡で観察すると横縞模様（横紋）が見え、自分の意識どおりに動かすことができる随意筋である。
16.	目で光を感じる反応にはビタミンCが不可欠であるため、ビタミンCが不足すると夜間視力の低下（夜盲症）が生じる。
17.	平衡器官である前庭の内部はリンパ液で満たされており、水平・垂直方向の加速度を感知する半規管と、体の回転や傾きを感知する耳石器官に分けられる。
18.	眼瞼は、素早くまばたき運動ができるよう、皮下組織が少なく薄くできているため、むくみ（浮腫）等、全身的な体調不良の症状が現れやすい部位である。
19.	血管の損傷部位では、血漿タンパク質の一種であるフィブリノーゲンが傷口で重合して線維状のフィブリンとなる。
20.	胃腺から分泌されるペプシノーゲンは胃酸によって、炭水化物を消化する酵素であるペプシンとなり、胃酸とともに胃液として働く。
21.	喉頭から肺へ向かう気道が左右の肺へ分岐するまでの部分を気管支といい、そこから肺の中で複数に枝分かれする部分を肺胞という。
22.	咽頭の後壁に扁桃があり、リンパ組織が集まっている。
23.	骨の破壊（骨吸収）と修復（骨形成）は、骨が成長を停止するまで繰り返され、その後は行われぬ。
24.	嚥下された飲食物は、重力によって胃に落ち込むのではなく、食道の運動によって胃に送られる。
25.	交感神経系が活発になっているとき、腸の運動は低下する。
26.	交感神経系が活発になっているとき、目は瞳孔収縮する。
27.	交感神経系が活発になっているとき、心拍数が増加する。
28.	交感神経系が活発になっているとき、膀胱の排尿筋が収縮する。
29.	消化液に含まれる消化酵素の作用によって飲食物を分解することを、機械的消化という。
30.	赤血球は、中央部がくぼんだ円盤状の細胞で、血液全体の約40%を占めており、赤血球は心臓で産生される
31.	副腎皮質ホルモンの一つであるアルドステロンは、体内に塩分と水を貯留し、カリウムの排泄を促す作用があり、電解質と水分の排出調節の役割を担っている。
32.	小さな子供では、耳管が太く短くて、走行が水平に近いので、鼻腔からウイルスや細菌が侵入し感染が起りやすい。
33.	薬疹は医薬品の使用後1～2ヶ月で起きることが多く、それまで薬疹を経験したことがない人であっても、暴飲暴食や肉体疲労が誘因となって現れることがある。
34.	皮膚粘膜眼症候群は、38℃以上の高熱を伴って、発疹・発赤、火傷様の水疱等の激しい症状が比較的短時間のうちに全身の皮膚、口、眼等の粘膜に現れる病態である。
35.	中毒性表皮壊死融解症は皮膚粘膜眼症候群と関連のある病態と考えられており、中毒性表皮壊死融解症の症例の多く

	が皮膚粘膜眼症候群の進展型とみられる。
36.	間質性肺炎は、一般に医薬品の使用開始から1～2時間程度で起きることが多い。
37.	接触皮膚炎の症状は、医薬品が触れた皮膚の部分だけでなく、全身で生じる。
38.	黄疸とは、ビリルビン（黄色色素）が胆汁中へ排出されず血液中に滞留することにより生じる、皮膚や白眼が黄色くなる病態である。
39.	偽アルドステロン症は、体内にカリウムと水が貯留し、体からナトリウムが失われることによって生じる病態である。
40.	ステロイド性抗炎症薬の使用により、細菌やウイルスの感染に対する抵抗力が弱くなることが知られている。
41.	副腎髄質では、自律神経系に作用するアセチルコリンが産生・分泌される。
42.	視細胞には、色を識別する細胞と、わずかな光でも敏感に反応する細胞の二種類があり、後者が光を感じる反応にはビタミンB6が不可欠である。
43.	チュアブル錠は、口の中で舐めたり噛み砕いたりして服用する剤形である。
44.	カプセルの原材料として広く用いられているゼラチンはブタなどのタンパク質を主成分としているため、ゼラチンに対してアレルギーを持つ人は使用を避けるなどの注意が必要である。
45.	薬疹は特定の医薬品で発生し、医薬品の種類ごとに生じる発疹の型は決まっている。
46.	医薬品による排尿困難や尿閉は、前立腺肥大の基礎疾患がある男性にのみ現れる。
47.	脊髄は脊椎の中にあり、脳と末梢の間で刺激を伝えるほか、末梢からの刺激の一部に対して脳を介さずに刺激を返す場合があり、これを脊髄反射と呼ぶ。
48.	脳は、細胞同士が複雑かつ活発に働くため、酸素の消費量は全身の約50%を占める。
49.	鼻腔上部の粘膜にある特殊な神経細胞（嗅細胞）を、においの元となる物質の分子（におい分子）が刺激すると、その刺激が脳の嗅覚中枢へ伝えられる。
50.	骨格筋の疲労は、乳酸の代謝に伴って生成するグリコーゲンが蓄積し、筋組織の収縮性が低下する現象である。

2章 ○×-4 こたえ

番号	解答	解説 (×のみ)
1	○	
2	×	ビタミンDではなく、「ビタミンK」
3	○	
4	×	「必須アミノ酸以外のアミノ酸」を生合成する
5	×	達しにくいではなく、達し「やすい」。
6	○	
7	○	
8	×	肺には筋組織がない。自力で膨らんだり縮んだりするのではなく、「横隔膜や肋間筋によって」拡張・収縮することで呼吸運動が行われる。
9	×	小腸ではなく、「直腸」
10	○	
11	×	糞便の成分の大半は「水分」で、そのほか、はがれ落ちた腸壁上皮細胞の残骸や腸内細菌の死骸が含まれる。食物の残滓は約5%に過ぎない。
12	×	比較的強い力ではなく、「比較的弱い力」
13	○	
14	×	経口服液剤は、比較的「速やか」に消化管から吸収されるため、固形製剤よりも有効成分の血中濃度が上昇「しやすい」。
15	○	
16	×	ビタミンCではなく、「ビタミンA」
17	×	「半規管」と「耳石器官」が逆
18	○	
19	○	
20	×	炭水化物ではなく、「タンパク質」
21	×	喉頭から肺へ向かう気道が左右の肺へ分岐するまでの部分を「気管」といい、そこから肺の中で複数に枝分かれする部分を「気管支」という
22	○	
23	×	成長が停止した後も「一生を通じて破壊（骨吸収）と修復（骨形成）が行われている」。
24	○	
25	○	
26	×	瞳孔収縮ではなく、瞳孔「散大」
27	○	
28	×	収縮ではなく、「弛緩」
29	×	機械的消化ではなく、「化学的消化」
30	×	心臓ではなく、「骨髄」
31	○	
32	○	
33	×	1～2ヵ月ではなく、「1～2週間」
34	○	
35	○	
36	×	1～2時間ではなく、「1～2週間」
37	×	接触皮膚炎の症状は、「医薬品が触れた部分にのみ」に生じ、正常な皮膚との境界がはっきりしている。
38	○	
39	×	体内に「塩分（ナトリウム）」と水が貯留し、体から「カリウム」が失われる
40	○	
41	×	アセチルコリンではなく、「アドレナリン（エピネフリン）とノルアドレナリン（ノルエピネフリン）」
42	×	ビタミンB6ではなく、「ビタミンA」
43	○	
44	○	
45	×	薬疹は「あらゆる」医薬品で起きる可能性があり、同じ医薬品でも生じる発疹の型は「人によって様々」であ

		る。
46	×	前立腺肥大等の「基礎疾患がない人でも」現れ、男性に限らず「女性」も生じることがある。
47	○	
48	×	約50%ではなく、「約20%」。消費量の数字は酸素20%、血液15%、ブドウ糖25%と覚える。
49	○	
50	×	「乳酸」と「グリコーゲン」が逆